
黄金(こがね)の銭士(せんし) ゼニカネーター

有松真理亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こがね
黄金の銭士 せんし ゼニカネーダー

【Nコード】

N1693V

【作者名】

有松真理亜

【あらすじ】

「しつこい悪をお金で倒す、黄金こがねの戦士・ゼニカネーダー、推参！」 謎のケダモノイドに追い詰められたひろ美を助けたヒーローって、もしかしてお金持ち！？（*他所で発表済みですが、テキストの転載には問題ないとの由）

第一話（前書き）

初掲載場所（挿絵つき）

<http://www.akiba.com/contents/>

第一話

「きゃああああっ！」

この悲鳴が、ホラー映画が何かを観てて挙げたものだったらどれほどよかったことか。

「へへへっ、おぜうさん、もう逃げられんよ。」

たしかに……ここは広い公園だけれど、私、那梨野ひろ美の後ろのフェンスの向こうは、漆黒に沈む夜の川。両側は植え込みで、正面には脂ぎったオジサン……というよりもはや怪人といっていい変なカッコのヤツが、ニヤニヤしながら寄ってきて。……追い詰められてるんですよ、私！

近道だと思つて夜の公園なんかに入るんじゃないかな……明日は誕生日だと言つのにツイてない。

「ちょっと仲良くしようつてだけじゃないか。」

「その顔は下心丸見えよっ！」

ネットで会話してて思わず想像しちゃった表情……なんかじゃない。生暖かい息と、嗅ぎ慣れない体臭と、酸化したアルコールの熱気を漂わせた「それ」が、わずかな街灯の明かりに影を落としながらリアルに少しづつ近づいてきて。

「恐がることはないよう〜。」

「恐いってより、気持ち悪いのっ！」

「あゝ？ 心が傷ついたなあ。」

こっちは体が傷つきそうよっ！ と反論したいけれど、議論しても意味はなさそうなのでやめておきます。

異性に対して「気持ち悪い」と感じるのは、動物としての生存本能だっつて、ガツコの保健体育の先生が言っていました。そいつは子孫を繁栄させるために適した相手じゃないからだ。

……子孫？ 私は、自分の思考に思わず戦慄しました。この、どぶネズミが巨大化したような臭い怪人おっさんと、その……ちよつと……なんていうか、ここには書けないようなことを、こんな夜の川沿いの公園の片隅で、することになるの？

「さあ、諦めてワシと気持ちよくなるお！」

怪おっさんが私の腕を掴む。そして次に……

「これって全年齢向きの小説だと思ってたのに！」

私が絶叫した瞬間、

「そのとうりだ！」

とつぜん……私でも怪おっさんでもない、第三者の声が聞こえました。

「むうつ…何やつ！」

誰でもいい、助けて！ 背の高い美形の王子さまとか、お金持ちのさわやかなスポーツマンがいいなんて、贅沢は言わなから！

心の中で叫んでから目をやった私は、「いや贅沢を言えばよかった」と激しく後悔しました。私の目に映ったのは、オジサンに負けず劣らずあやしい、きんきらきんのカッコをした男。

「におうつ…におうぞ。 星も届かぬ暗闇に、悪の臭いが漂っている。」

そのきんきらきんの怪人（？）は、表が黒で裏が赤のマントをばつとはためかせました。すると、胸におっきい「¥」マークが。

「しつこい悪をお金で倒す、黄金^{こがね}の戦士・ゼニカネーダー、推参！」

そして顔は、コインをかたどったようなでかい円盤の中に。昔、ヒーロー物のTV番組の再放送で見た「ゼニク・ージー」という怪人を思い出させる姿に、私は腰が砕けそうになりました。

「背の高い」と「お金持ち」というところだけは願いがかなったっぽいけど…神様って、けっこうイジワル。（涙）

そんな私の気持ちなんか気にもせず、おっさんが背を丸めてスゴみます。

「ふふふ…キサマがゼニカネーダーか。聞いているぞ。仲間がずいぶんお世話になったようだな。」

「……やはりお前はケダモノイドか！」

何が何だかわからない会話に呆然としているうち、おっさんが体をゆすると、肉がみるみる盛り上がり、服が裂けはじめました。

人間のものだと思っていた皮膚にたちまちのうちに剛毛がはえていきます。

私は驚いてしまってもう悲鳴も出ません。口をあんぐりとひらいて、見ていることしかできません。

「ケダモノイド・イノシシー！」

そのまんまやがな、もつとひねりなさい！ とツツコむ余裕なんかもちろんありません。

「よくも繁殖の邪魔をしてくれたな！ 晩ごはんのエサにしてやる！」

あまりにツツコミたいところが多すぎるセリフに、私はもつどうしていいかわからなくなってしまう、口をパクパクとさせるだけ。そうこうしているうちにそのイノシシ人間のケダモノイドは、ゼニカネーダーと名乗る怪人……黄金の銭士？に、雄たけびをあげて突進して行きます。

ゼニカネイダーはマントを翻らせてこれを「ひらり」とかわすと何か紙の束のようなものを腰のポーチのようなものから取り出しました。

「必殺、キャッシュビル・ブリザード！」

キャツシユビルって何？ と思った1秒後、その意味がわかりました。

それはC a s h B i l l （現金のお札）！

「ぎええええ！ もったいない！」

私の叫びが空しく響く中、ゼニカネーダーの手から離れた諭吉先生（1万円札）の紙吹雪が、川面に広がりました。

危うく川に飛び込みたくなる本能の衝動を理性で必死に抑えていると、ケダモノイドのおっさんが先にフェンスをぶちやぶって、川に飛び込みました。ケダモノというだけに理性が弱いからね……。

「うわああ！ 俺は泳げないんだー！！」

夜の川に響き渡る叫びに、ゼニカネーダーは二本指を立ててつぶやきました。

「貧困なる魂よ、安らかに眠れ……」

ケダモノはわめきながら川に沈んで行きます。

……私、助けられたんでしょうか？ このキンキラキンの謎の男に。

「もう大丈夫です。」

思わずへなへなと腰が抜けてしまった私に、ゼニカネーダーは手を貸して立たせてくれました。

「一見なんともなさそうに見えても、夜の暗闇には何が隠れているかわからない。遠回りでも、安全なところを歩いた方がいいと思います。」

「は、はい……」

暗い中でも、せめて顔を確かめておこうと、でかいコインの中を覗きこもつとすると、

「あつ！ き、君は！？」

ゼニカネーダーは何かに驚いて、さっと私から離れました。

「じゃあ気をつけて！」

そして、まるで顔を見られたくないかのように、金色のスクーターに乗って走り去って行きました。

「あ……まだお礼も言っていないのに……」

ていうか、助けたんなら最後までエスコートしなさいよ。

翌日。あんな異常な体験があったにも関わらず、日常は日常として展開してました。私も、何事も無かったかのようにガッコに行きます。

いつもの教室です……台風が近づいているという話で盛り上がっ

てる他は。

朝っぱらから、ファッション雑誌を広げて騒いでる女子たち、カ
ードの野球ゲームで騒いでる男子たち、そしてジューズ買ってこい
のなんのとイジメをしている人たち。

昼休みもそのまま変わらず。雨の音以外は、まあいつもどおりで
す。

きれいなモデルの写真を見て「いいな、これ欲しい！」とか言
ってる女子、油原ふと子。自分に似合うかどうかちょっとは考えて
からものを言えば？

「カキーン、ヒット！ 三遊間抜けた！」とか得意な顔でわめい
てる男子、抜田大作。それはサイコロがそういう結果を出しただけ
で、自分はエラくもなんともないのよ、あんたは別に体を鍛えた選
手じゃないんだから。

そしてニヤニヤしながら注文をメモして出ていく男子、蔵森金一。
あんたはみんなの役に立ってるんじゃないくて、遊ばれてるのよ。そ
のくらいわかるでしょう、立て替えたお金を返してもらってないん
だから。ちょっとは自分で状況を変えることを考えなさいよ。

あー、イライラする……こんな毎日を変えるようなことが何か欲
しいわ。

そう考えると、昨日の夜のことが記憶に蘇りました。そう、私は
ピンチを、背が高くてお金持ちでスポーツマンの王子さま……後半
になんか妄想が入ったけど……に助けてもらったの。でも……

「金持ちで背が高い、か……でもねえ。」

「え？ 何か言った、ひろ美？」

「あつ、うつん、なんでもない！」

思わず口に出てたみい。危ない、あぶない。

この学校にも、親が金持ちの生徒はいます。だけど、少女マンガに出てくるメガネの美形みたいな、カッコいい男子はいなくて。

金持ちの子って、だいたい体格はいいんだけどオシが弱いつていうか。意外に卑屈なのよね。それに、性格にちよつと屈折したところがあったり。だから気がつくといジメの対象になってたりするわけ。

でも私は食べ物や飲み物を買に行かせたりはしません。だって、紙コップのコーヒーなんか買に行かせて、途中で汚い物でも入れられてもわからないでしょう？ もつとも、入れられてなくても、「口をつけたろう」とか「外が汚れてる」とか「さめてる」とか、文句つけてそれを捨てちゃって、立て替えたお金を踏み倒すのがイジメなんでしょうけれど……。

「ああ、なんかイライラするなあ。」

「ん？ ざぶとんならあるよ？」

「いや、その話じゃなくて！」

教室では考え事もできやしない。私は席を立って、パンでも買い

に行くことにしました。

・・・っ！

第二話

昼間は学校から外出禁止……というのは建前ですけど、複数の敷地にわけて建てられてる施設を行き来するために、授業中以外には門が開きっぱなしになっています。しかも雨降り。誰が見張ってるわけでもないから、外出は自由も同然なんです。

傘を差して近所のコンビニへ行き、つまらない日常にため息をつきながら菓子パンを選んでますと、突如、けたたましい声が……。

「ワハハハハ！ 私はケダモノイド・シカダッシャー！ レジの金を全部出しいか！？」

手に持ったパンが音を立てて床に落ちます。

いきなり、また非日常が現れてしまいました。だけどケダモノイドという言葉に思わず反応してしまった私。

レジ前で弓矢のようなものを構えて店員さんを脅迫していたのは、角のあるシカの毛皮をかぶった怪人・シカダッシャーでした。

「ちょっと待って！　なんでシカが人を弓で狙ってるのよ！」

「シカは長年、人に弓で射られてきたんや。シカだったたまにはシカえししたってええやんけ！」

「そ、そという問題なの！？」

こうしてまた非日常が始まりました。いいえ、望んでません、こんな非日常、けっして私は！けれど、日常がたんと進行していくように、非日常もまたたんと進行していくのです。

店員さんは、強盗には逆らわないというマニュアルでもあるのでしょうか、慣れた手つきでレジスターからお札をだしてカウンターに起きます。しかしシカダッシャーと名いうそのケモノイドは両手で弓を構えていて、

「し、しまった！ 両手では弓シカ持てず、金を取ることができません！」

あ、なるほど……だから「弓矢強盗」というのはあんまりいないのね、と私が変に納得してしまったとき。

「そこまでだ！」

そ、その声は！

「におう…におうぞ。はやらぬ淋しいコンビニに、悪の臭いが漂っている。」

振り返ると入り口に、表が黒で裏が赤のマント、そして胸にはおつきい「¥」マークのゼニ・レージー、じゃなくて……

「しつこい悪をお金で倒す、黄金こがねの戦士・ゼニカネーダー、推参！」

でたっ！ と、なぜか喜んでる私がいきました。

「むっつ！ シカ狩りの獲物にしてけっかる！」

えっ、シカ狩りってシカを狩ることじゃなくてシカが狩ることだったの！？ と心の中でツツコンでるうちに、シカダッシャーとゼニカーダーの闘いが始まってしまします。

弓で矢を放った後、シカダッシャーは角を振りながら突進しました。ゼニカーダーは、激しい雨の中を駐車場へと下がりながらこれを「ひらり」とかわす。しかしゆうべのケダモノドイド・イノシシーと違い、シカダッシャーは左右に首を振りながら攻撃します。さすがのゼニカーダーも……というか、もともと動きにくいカツコしてるのだから、これをいつまでもは避け切れません。

「シカツノアッパー！」

シカダッシャーが下から上へ大きく首を振ると、角がゼニカーダーのアゴを捉え、高くふきとばしました。なぜか「JET！」という擬音も聞こえました。

ゼニカーダーは地面に叩きつけられ、もんどりを打ちます。雨とはいえ下はアスファルトですから、痛くないわけがありません。

「うつつ、なぜシカなのに強盗するんだ……」

ゼニカーダーが、転がったまま打ち身をさすりながらつぶやくと、シカダッシャーが答えました。

「シカだって金が欲しいわい！ シカし、この体ではろくなバイトもあらへん！ だから強盗もシカたないんや！」

一瞬、納得しそうになったけれど、よく考えてみれば自分勝手な

理屈ね。

まあ理屈はともかく、正義のヒーローがピンチなのはたしか。さ
てどうしたものかとふと下を見ると、シカダッシャーが捨てて行っ
た弓と矢が床に転がっていました。

私はそれを手に取ります。あ、私、弓道部なんです。言っ
てませんでしたっけ、てへっ。

弓は絶対に人に向けてはいけなないと、背骨のズイまで叩きこま
れている弓道部員ではありますけど、あれは人じゃなくてケダモノ。
射つてもいいわよね、と自分に言い聞かせ、普通に頭上からではな
く、日置流で下向きに引き絞って（え、マニアック？）狙うなり、
親指で引いた弦を「ひょうふっ」と放ちます。

矢は見事にシカダッシャーのお尻に命中。

「当た~~~~あ、り~~~~い……！」

命中したときの習慣で思わず口に出してしまいましたが、シカダ
ッシャーの絶叫はそんな声もかき消してしまいました。

「痛いやん、痛いやん！ くやシカ！ なにすんねん、このドブス
！」

ど、ど、どぶす？ 私が？ むつかあ~~~~！！

そりゃあたしかに「絶世の美女」とか「今生きてる中で最高のビ
ューティ」とか言ったら言いすぎだろうけど、それでも一回は男子
にコクられたことあるのよ！

次の瞬間、私はツカツカと歩み寄り、弓でシカダッシャーのお尻をひっぱたいてました。

「うぎゃあ！」

三発、四発……乙女の怒り、思い知ったか！

「ひいつ、ひいつ！」

「もうやめるんだ、那梨野さん！」

ゼニカネーダーが立ち上がり私を静止しました。

「美しい女性の手は怒るためにあるんじゃない。愛するためにあるんだ。」

キ、キ、キ、キザなセリフ……！！

普通こんなことを言われたらゾゾツとするところですけど、相手は昨日助けてくれた男性。雨の中で腕を握られてこんなこと言われ、私、思わずビビツときてしまいそうです。

「危ないところを助けてくれてありがとう。だけど後は僕に任せてくれ。」

ゼニカネーダーは、雨に打たれながらお尻を抑えてうずくまってるシカダッシャーに向かって問い掛けました。

「貴様、命と金と、どっちが大事だ！？」

「うつつ……か、金。金に埋もれることができるなら命は失ってもシカたない……」

「金に埋もれることができたなら命を失っても構わないのだな？」

「シカリ。」

「では望みをかなえてやろう。」

ゼニカネーダーが指で合図をすると、駐車場に止まっていたダンブカーがバックで近づいてきました。そして、シカダッシャーに後ろを向けて止まると、荷台が上がって……

ジャラジャラジャラジャラッ！

滝のように、百円玉が大量に降り注ぎます。

「ぎゃああああっ！ ごつつ苦シカ〜！」

シカダッシャーはその中に埋められていきました。

「2トンの100円玉に埋もれて窒息……せめて夢をかなえて死ぬがいい。」

も、もったいない！！ 2トンの百円玉って、いったいいくらなのよ……！（あとで計算してみて、4千万円ちようどということがわかりました）

「ゼニカネーダーって、ホントお金持ちなのね。」

お金持ちなら顔や性格が悪くても脚が短くても着てるものが悪くてもいいってわけじゃないけど、やっぱりそれも男性の魅力のひとつなのよ。はら、男の人も、女の性格が悪くても顔が少しくらい大魔神でも、胸が大きいと惹かれるっていうじゃない？ たぶんそれと同じで。

私はなんとなく彼に好意を持ちはじめていました。

「ところでゼニカネーダー、なんで私の苗字を知ってたの？」

「……あつ！」

ゼニカネーダーは、驚いて声を上げました。私は、おつきなコインの中にあるその顔をのぞきこみます。金色に塗られていてよくわからないけど、この顔はどこかで見たことがあるような……。

ゼニカネーダーはマントで顔を隠すようにして、走り出します。

「あつ、待って……」

「君も、風邪を引かないうちに、学校に帰って着替えなさい！」

そんなセリフを残し、駐車場の隅においてあった黄金のスクーターに乗って、ゼニカネーダーは去っていきました。

見送るしかない私でしたけれど……彼が去って行ったあとの水溜りに、落とし物を見つけました。それは、生徒手帳でした。ええ、お約束です。なにしろ連載コンテンツは1話あたりの行数に制限がありますので……。 （注：初掲載場所での制約）

「蔵森っ！」

学校に戻って体操着に着替えた私は、タオルを頭に載せたまま、教室で、問題の男子の前に立っていました。え？ 体操着はスパッツかブルマか？ そんなことどうでもいいじゃないですか、絵師さんの好みにお任せしますよ。（注：初発表場所では挿絵付き）

そんなことより問題は、コイツです。

「ちょっと話があるの。ここじゃ話にくいから、顔貸してくんない？」

- - - つづく！

第三話（最終回）

周囲がどよめきました。

「ひろ美……あんだ『イジメは嫌い』って言ってたのに、やっぱり普通の人間だったのね。」

ちがう、イジメじゃないっ！……って反論したいけど、説明するのめんどくさい。

蔵森の袖を掴み、引きずるように教室を出ます。蔵森のやつは、おびえたようなヘラヘラ笑を浮かべています。こいつ……ホント、イジメたくなってくる気持ちかわかるわ！

とにかく、屋上への登り口に引っ張っていきました。

外からは激しい暴風雨の音。

「く・ら・も・り」

「な、なにかな、那梨野さん？」

私は、拾った手帳を叩きつけるように、彼の胸に押し付けました。そして、下を向いてしまい……

「ゼニカネーダーの正体、あんだだったのね。」

見つかって嬉しいんだか、こんな奴だったことが悲しいんだか。

「い、ごめん……」

「なんで謝るのよ!」

私はイラついて叫んでしまいました。そういえば、こいつってば、あの時も、謝りやがった……。

「悪いことやってるわけじゃないでしょ!？」

「そ、そうだけど……」

「さあ、洗いざらい話しなさい。」

「何を？」

「なんで正義の味方なんかやってるのかよ。話さないなら、前に私にコクッたことと合わせて、みんなにバラすわよ?」

うわ、私ってば、悪人ばくない!?

「わ、わかった。話すよ。」

蔵森のやつは、観念した表情になりました。

「実は……じいちゃんの遺言なんだ。」

「へ?」

もつとすごい理由を想像していた私は、あっけにとられます。

「悪の組織・ナチユラル党というのがあって……」

「なんか健康によさそうな悪の組織ね。」

「動物と人間を融合させたケダモノイドを作り、世界征服をたくらんでいるんだ。」

「はあ……」

なんてベタな設定。

「地球を、大自然な状態にしよう……」

「それっていいことじゃないの？」

「文明が滅びて、人間が全部、汚いケダモノになるってことだよ？」

「そ、それが大自然かッ！」

「大自然というのはもともと、汚くて臭くて虫がいっぱいっていうものさ……」

そ、そうか、たしかに……TVとかで自然の素晴らしさを観るだけじゃすっかり忘れちゃうけど、文明がなくなったら、たしかに汚くて臭くて虫がいっぱいになります！

自然派を自認していた私は、激しい葛藤に襲われ、頭を抱えて膝をついてしまいました。そんな私に蔵森が声をかけてきます。

「自然を愛するなら、それを受け入れることが必要なんだよ。」

たしかに、愛するってことは、いいことも悪いこともすべてを受け入れなきゃならないってことだけど……にしても。

「あつ、ちよつと待つて。ってことは、そのナチュラル党とかいう人たちはその覚悟があるってことなの？」

「いや。奴らは、世界中を大自然にすれば、自分たちだけは公害を出しても平気という考えかたなんだ。」

「な、な、なんて身勝手な！」

「僕は、金持ちだったじいちゃんの遺言で、遺産を、ナチュラル党のケダモノイドと闘うために使わないといけなくなつたんだ……17才の誕生日から。」

「それで、あんな趣味の悪いスーツを作つたわけ？」

「いや、あれもじいちゃんの遺言で、……ほんとに嫌なんだけど。」

……。

「うーん、『じいちゃんの遺言』じゃ、嫌でもしょうがないわね。」

そう、じいちゃんの遺言は絶対なのです。

「うん……だけど、このことは誰にも……」

「言わないから安心して。」

蔵森の表情に、急に安心が溢れ出しました。

私の一言でこんなに表情が変わる……こんなヤツ、こんなヤツ……
…うかつにも、ちょっと「かわいい」とか思ってしまった。

その日の午後。さらに激しくなる台風で、ダイヤに影響が出始めました。町中はまだ動いているけれど、新幹線とかは不通が出始めたようです。

下校時間が早まり、今日ばかりはみんな、そそくさと帰り支度を始めました。

私もバッグに荷物を詰め込んでると、そこへ先生があわただしくやってきまして。

「那梨野、いま家から電話があつてね。おじいさんが危篤で、お前に会いたがつてるそうだ。家に帰らず直接に行くようにと。」

「はあ？　なんでまた突然！」

私は驚き呆れました。だけど、どうも事態は急を要するようです。

激しい風雨の叩きつける中、私は必死に傘を構えて昇降口を出ました。傘の外になつてしまうスカートや足に、前から雨が降りかかってきます。校門を出てバス停に行くまでも一苦労でした。

が、そこには貼り紙が……

「台風のため、午後のバスは全便欠航です。」

お前は飛行機かつ！

と、ツツコんでも一人。泣きたい気分で途方にくれていると、暴風の中を、高いエンジン音が聞こえてきました。

「あつ、ゼニカネーダー！」

そして黄金のスクーター。

「那無野さん、乗るんだ。おじいさんのところへ行くんだろ？」

「う、うん。だけど送ってもらわなくても……」

「電車も不通になってる。」

な、なにいつ！

「でも、スクーターに二人乗りは……」

「安心してくれ、これは中型だ。」

とりあえず、荷物をシートの下に格納してもらい、ヘルメットをかぶってゼニカネーダーの後ろに座ります。（ゼニカネーダーはノヘルです）

「飛ばすからつかまっててくれ。」

エンジン音とともにスクーターは一気に加速し、滝のように水が前から後ろへ流れていきました。

「ねえっ！」

風に負けないように大声で怒鳴ります。

「そんな頭してて、苦しくないの!？」

「実は…メチャ苦しい！」

そりやそうでしょう。すげ笠を被って自転車を飛ばすのだって苦しいんです。頭にこんなにかいコインをつけて60km/hくらいで走ったら、風圧がすごくないわけがありません。

「このスーツは、改良の余地があるな！」

改良とか以前の問題だと思っけど……

「いつそ、コインじゃなくてお札にしたら!？」

「ああ、それはいいね！」

スクーターは河のように流れる水をつん裂いて、田舎道へ入っていきました。

「おじいちゃん！」

濡れた服をタオルで拭くのももどかしく、私は座敷へ駆け込みました。

「おおつ、来たか。」

ところがおじいちゃんは、コタツに座って海苔せんべなどかじってるではありませんか。そしてTVでは「四匹が斬る！」が。

「あれ？ 危篤じゃなかったの？」

「それでも言わないとお前、来ないじゃろ？」

うぐっ……うちの家族はこういう嘘が多いから嫌い！ 「オオカミ少年」っていう童話を知らないのかしら？

「今日はとても大事な用があったのじゃ。お前は今日が17才の誕生日じゃろ。」

「ええ。」

「実は、昔、親友と約束してな。お互いの孫が17才になったら、悪の組織・ナチュラル党と戦う正義のヒーロー／ヒロインにしよう」と……」

……なんか、どっかで聞いたような話なんですけど。（汗）

「嫌。。。」「

そう言った私ですが、とたんに。

「うううっ!」

突然、おじいちゃんが突っ伏して苦しみました。

「ど、どうしたのおじいちゃん!？」

「じ、持病の肺癌が!」

肺癌で持病なのかッ!？

「わ、わしはもうだめじゃ! ひろ美、お前はこの、借金して作ったスーツを着て、正義のヒロインになってくれ……これがじいちゃんの遺言じゃ! うううっ、がくっ!」

じ、じいちゃんの遺言!! この世に逆らってはならないものが二つあります。自分の良心とじいちゃんの遺言!

しっかり「がくっ」まで声にして力尽きたおじいちゃんを、渡されたスーツを手にながら、私は呆然と見つめていました。

漁港で暴れていたケダモノイド・イカゲツソ（イカってケダモノなの?）の前に、私は立ちはだかります。ううっ、はずかしいよう。

「におう……におうぞ。昼下がりの漁港に、悪の臭いが漂っている。」

こんなセリフ言いたくない、言いたくないけど……

「借金の戦士・ゼニ『ガ』ネーダー、推参！」

なんて恥ずかしい名前の正義のヒロイン！　そして、お札の真ん中に顔という恥ずかしいカッコ！

そんな私の、ゼニカネーダーと一緒にでの戦いは、まだ始まったばかりなのです。

――自主的に打ち切り。（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1693v/>

黄金(こがね)の銭士(せんし) ゼニカネーダー

2011年10月9日11時17分発行